610

特255
264

河相達夫述

省情報部長

危機の歐洲

納本

日本青年外交協會出版部

10セン

始

特 255
264

外務省情報部長
河相達夫述

危機の歐洲

日本青年外交協會出版部

昭和十四年
帝國大學

最近の國際情勢は申すまでもなく歐羅巴を中心にして大きな動きを致して居りますが、昨年の九月三十日に決定したミュンヘン會議の決定事項を出發點にして、その後の動きをお話申上げるのが一番便宜かと思ひます。

そこで大體、昨年九月三十日のミュンヘン會議以前の情勢に就ては、極く大雜把にだけ申上げて、さうしてその後の情勢に就て若干詳しく申上げて見たいと考へます。

御承知のやうに、歐洲戰爭の結末はヴェルサイユ條約に依つて決定された譯でありますが、あの際同盟側に對して聯合側から千三百二十億馬克といふ大きな賠償金を課して、而も尙且つ、それぢやまだ足りないのだ、その他の海外に於て聯合側の

個人の被つた損害はまた別だ、といつたやうな大きな賠償金の要求が列國からあつたのであります。

さうして獨逸は兎にも角にも一應それを納得せざるを得なくさせられた譯であります。これは獨逸の方から申しますと、戰爭には負けたけれども、なに戰鬪で敗れた譯ぢやないのだといふ一つの肚もあり、こんな計算も出來ないやうな大きな數字の賠償金なら、これはどうせ拂へるものでもないし、無理を言ふなら一應肯いて置け、といつたやうな氣持で、一應は引受けたやうであります。

ところが、この賠償金問題が幾度か、或はドーズ案、或はヤング案といふやうなものになつて、次第に減額され、最後には三十億といふやうな金額になつてしまつたのでありまして、兎にも角にもこの條約に依つて決めた卽ち法律的に申せば契約なるものの內容といふものが、いつの間にやら斯ういつたやうな大きな變更をされてもどうにもならなかつたといふ所に、もう既にヴエルサイユ條約の拘束力といふ

ものの弛緩が窺はれる譯であります。

又一方、軍備に就ては、獨逸に對して、正規兵は陸軍十萬、海軍一萬五千、戰鬪艦は一萬噸以下、潛水艇は一切造ること相成らぬ、軍用飛行機も造ることは罷り成らぬといつたやうな制限をしました。これも獨逸人から見れば非常な不平であります。軍縮は成る程我々も主義に於ては贊成だ、併し獨逸ばかりが軍縮をやつて、聯合側では更に軍縮の實を擧げないぢやないかと、非常な不平で、そのうちにだんだん日子が經つに連れ獨逸の國力もいつの間にやら次第に回復して來る。まあ「物其の平を得ざれば卽ち鳴る」で、どうしても獨逸は不平を鳴らさざるを得ないと斯ういふ譯であります。又一方聯合國側に於ても、これに屬して大いに働いて而も非常に酬ゐられなかつたといふ伊太利の不平が次第に大きくなつて參つたのであります。

今日よく申しますヴエルサイユ體制なるものは、その戰後を承けて英佛並に米等

の希望するが如き體制をこの條約の力に依つて歐羅巴に實現させて、さうして地圖の色を塗り替へたと斯ういふことになるのでありますが、同じやうな趣旨を極東に適用して、極東に於ける當時の新しき體制といふものを作つたのが九ヶ國條約であると斯ういふことになります。言ひ換へれば、九ヶ國條約はヴェルサイユ條約の一延長と見てよい。卽ち歐羅巴に於けるヴェルサイユ體制の延長が極東に於ける九ヶ國條約體制といふものだと見て差支ないと思ひます。それで歐羅巴に於ける伊太利の地位と、極東に於ける日本の地位とは、同じやうに聯合國側に屬して多大な貢獻をしたに拘らず、奪はれる所があつて、與へられる所がなかつたと斯ういふ譯になつたと思ふのであります。

そこで獨逸の不平と伊太利の不平が歐羅巴に於て次第に擡頭し、これが一九三一年になつて或る形を執つて來ました。それは何かと申せば、先づ獨逸の軍縮會議脫退問題であります。

當時既にヒトラーが餘程勢力を伸ばして來た獨逸は、軍備に就ては獨自の立場から自由に自分の欲する程度の軍備を整へる、左樣御承知相成りたい、といつた捨臺詞を殘して脫退してしまひました。それからどんどん陸軍の增强から着手したのであります。正規兵十萬といふ、この制限を眞正面から破れば條約違反といふのでやかましい問題が起る。そこで警察隊とか或は突擊隊とかいふやうな名義でどんどん殖して、忽ちにして四十四、五萬に殖えてしまつた。伊太利はやれやれといふ調子でこれに頻りに聲援を送る。既に千三百二十億の賠償金を三十億に減らされても大した力を獨逸に加へ得なかつた聯合國側は、この軍備の制縛を自ら解いた獨逸に對しても、同じやうに無力でありました。これに對して眞先に暗默の裡に同意を與へたのは英吉利であります。聯合國側の中心を成して居る國としては、甚だ怪しからぬ態度でありますが、兎に角現實の力の關係といふものが其處まで來て居つた譯なんであります。

天下は活物、活きて居る物である、その活きて居る物を契約といつたやうな紙の上で書いた文字だけで括り、それで相當の期間は括つて行けるものと、斯う高を括つた所に、英佛、所謂聯合國側の主要國の用意の不十分な點があつたと思はれます。

斯樣な次第で、獨逸と伊太利とは、歐羅巴に於て同樣な境地に置かれ、さうして國內に於ける赤化運動の後を承けて全體主義國家の體制に進んで來て、玆に同じ方向を辿る運動を起すやうになつた譯であります。

ところがその發展の方向に就ては、獨逸と伊太利との間に必ずしも最初から一致がある譯ではなかつたのであります。先づ第一着に、伊太利が發展せんとする方向と、獨逸が發展せんとする方向とは、まさしく牴觸してゐたのであります。それは何かと申せば、獨逸の墺太利併合、又伊太利の墺太利に對する覇權の維持——覇權は少し大き過ぎます——政治的勢力保持、斯ういふ點であります。

伊太利とすれば、大體伊太利本國は、支那で申せば廣東省くらゐの面積しかない。

天然資源の乏しいことは申上げるまでもない。幾かに北の國境方面の山岳地帶で水力電氣を作る。これを盛んにやつてこれが最近伊太利の工業の大きな力になつてゐる。これだけなんです。食料を得る點から云つても、どうしても墺太利その他バルカンの國々に關心を持たざるを得ない、斯ういふ事情の下にあつた。獨逸から申せば、その當時提唱された譯ぢやないけれども、獨逸民族を打つて一丸にしたいといふ氣持が非常に強い。又獨墺合併問題といふものは、長い歷史もあつて、何としても墺太利は併合したいといふ、この氣持は國民的な希望であつた。

そこでこの兩國の希望が玆に於てぶつかつたのであります。さうしてそのために伊太利がチロル方面に出兵したことも一再ならずあつた譯なんであります。

一九三四年にヒトラーがムッソリニをヴェニスに訪問した時も、ムッソリニの方から、一つ墺太利問題で妥協しようぢやないかといふ話を切出したとの說があります。さうすると、ヒトラーは、それは眞平御免だ、私は獨逸との境の墺太利の一寒

村に生れた者なんだが、幼少の頃から自分の念願として居ることは、獨逸民族を打つて一丸とすることなんだ、そればつかりは眞つ平だ、といふことでけんもほろろに拒絶を致しました。そこでムッソリニは非常に機嫌を惡くして、どうもヒトラーといふ男は政治を解しない男だといふ非難を當時致したとも傳へられるのであります。これは新聞等に出ない一つの消息でありますが、一概に否定も出來ますまい。

ところが、さういふ事情にあつた獨逸と伊太利との間に、いつの間にやら次第々々に協同作業をするやうな姿勢が出來て參りました。何故それが出來たかといふとその最も大きな原因は、この兩國が獨裁國であり、さうして殊に昨年の初、一昨年の暮あたり、獨逸に於けるヒトラーの獨裁的地位が非常に强化されて來た、これが大きな原因を持つて居ると思ふのであります。

伊太利に於けるムッソリニの獨裁振りといふものは、これは管々しく申上げるまでもないことでありますが、我々に關係する一つの點を取つて見ましても、例へば滿洲國の獨立承認の際の如きも、獨逸がまだ承認しない前に、ムッソリニが、承認してしまへといふことを突然言ひ出した、そのお聲掛りで伊太利の官僚が早速其の方針を體して承認方を申込んで來たので、當時羅馬から電報が入り、何等の前交渉もなく、突如として承認すると言つて來たので、我々も實は驚いたのです。又、日獨の防共協定に伊太利が參加した時など、羅馬官邊ではどうも日獨の間の詳しい話も突止めずに伊太利が入つたのでは、國の面目問題だ、又利害關係の上からも容易ならざる不安があるといふことで非常に躊躇してをつたので、羅馬では話が一寸進み兼ねて居りました。ところがムッソリニは、ヒトラーからの絶つての勸めがあるから、いいだらう、入れ、と言つたので、バタバタと決まつたやうな事實があるのであります。斯ういつたやうなムッソリニの獨裁振りなんです。

ところで獨逸に於けるヒトラーの地位は、昨年の初頭、獨逸の軍部を完全に彼の

膝下に跪づかせることに成功して後、急速に强剛を加へたのであります。

昨年の二月二十日、國會に於ける彼の演說中に於て、突如として滿洲國の承認を聲明致しました。ところがその前日までリッベントロップもそれを知つて居なかつたやうであります。これはリッベントロップにはつきりと訊いて見た譯ぢやありませんが、その前日までの我が方との交渉の模樣を見ると、どうもリッベントロップは知つて居なかつたやうでありまして、ヒトラー總統が自分一人で決めて聲明してしまつたのであります。さうして又同じ會議に於て、墺太利の獨逸との合併問題に就ての意圖を明かにした譯であります。これらの事實を見ても、その以前に於けるヒトラーの獨裁的地位といふものとの間には、非常な懸隔があります。

斯樣な譯で、兩者の獨裁的地位が强剛を加へると同時に、この兩者の間の話合が非常な緊密さを加へて來たのであります。それでヒトラーとムッソリニの二人の話合が卽ち獨伊兩國の話合と、斯ういふことになりまして、極く側近の連中すらも知

らないうちに、どんどん話が進んで居るらしく推測されるのであります。

そこでこの獨伊兩國關係が、當初は必ずしも一致しなかつた情況から完全な提携關係に入つて來た經路を窺ふには、非常な困難があります。外部の人の知らないうちに、各々自分の國を一身で引摺つてさうしてこの兩國關係を進めて來たやうな次第なんで、甚だ窺ひ兼ねる點がありますが、兎に角非常に緊密な提携をして居ることは間違ひのない事實であると思はれるのであります。

この兩者の緊密度がどんどん進んで行つて居ることに甚だ迂濶であつた最初の人間は誰であつたかと云ふと、それは墺太利の當時の總理大臣シュシュニックであります。

墺太利とすれば、獨逸の攻擊に對して恃む所は、伊太利を引入れてこの力に依つて防禦するといふことのみである。從つて獨伊の間の關係がどう動いて居るかといふことに就ては、非常に神經を鋭くしてこれを見て居つたに違ひない。ところが非

常な誤算をしたのであります。

それは愈々ヒトラーが獨逸の軍力を墺太利へ入れて一擧にその希望する所を遮二無二達成しようといふ態度に出た折に、シュシュニックは電話でムッソリニを呼出して、さうしてムッソリニの援助を請はうとした。ところがムッソリニは電話口へ出て來ずに、それをすつぽかした上に、反對に、伊太利の新聞は筆を揃へて獨逸の墺太利併合に向つて聲援を送ることになつた。これがシュシュニックの内閣を投出して總崩れになつた大きな原因を成して居ります。

斯樣な譯で、兩國が非常に緊密さを增して來たことが、その隣國の而も非常な利害關係を持つて居つた總理大臣にも分らなかつたといふ程度にまで當時既に進んで來て居つたのであります。さうして獨逸の墺太利併合も、ヒトラー自身が豫期もしなかつたほど、易々と行はれたのであります。

實は最近獨逸から新聞使節が參りまして、私も色々話を聞きました。さうして、

九ヶ國條約といふものは我々に取つては丁度瀧を登らんとする鯉に對する瀧みたいなものだ、我々の面前に懸つて居る瀧なんだ、これは何としても飛び越さなければいかぬのだと斯ういふ話を致しましたら、いやそれは瀧でないかも知れぬぞ、俺達も實は歐羅巴に瀧があると思つてやつたが、やつて見ると案外瀧ではなかつた、と斯ういふ冗談話をして居りましたが、この獨逸の墺太利併合の際にもヒトラーは當初あれほど易々と行くとは考へて居なかつたやうで、それは當時の軍隊の動かし方、チロル方面或はダンチヒ方面のナチに對する指令等を見ると、よく窺はれるのであります。それが兎に角易々と獨墺の併合をやつて、さうして平和條約の規定を眞正面から否認して、あの併合の宣言をした譯なんであります。

當時英吉利では若干の騷ぎがありまして、兵隊の足留めなども指令し、又新聞も獨逸の條約違反を指摘して攻擊を加へて居りましたが、政府自體としては大した動きをせずに、輕い抗議をする程度に止まつて居りました。これは恐らく英吉利とし

ては、獨逸の作り上げた既成事實を承認して、墺太利の犠牲に於て何とか一時の安きを得ようといふ見地からだつたと思はれるのであります。又、墺太利を一枚獨逸に與へて置けば、獨逸は當分これをいじくつて居つて、これに忙しいだらう、事後の整理問題、經理問題などのために暫く忙殺されて、獨逸の新しき發展運動は起さぬだらうと見て居つたのであります。從つて歐羅巴に於ける所謂外交消息通の中では、次に來るべき問題はチェッコの問題だといふことは、これは齊しく見て居りましたが、扨てチェッコの問題が何時來るだらうといふ點になると、さう早くは來ないだらうといふのが大體の一致した見方でありました。

ところが事實は、もうその翌月の四月になると、ズデーテンに於けるナチ獨逸人が少し動き始めた。最初はつまらないことで、獨逸語の使用問題で、獨逸語を公用語として認めろ、或は獨逸語に依るラヂオの放送がない、といつたやうなことで不平を言つて居つたが、それがだんだん急速に進んで來て、ズデーテン獨逸人の自治

問題といふ所まで發展して來たのであります。

それに對するチェッコ・スロヴァキア政府の對策も甚だ徹底味を缺いて居つた點があつたと思ふので、今日になつて見ると、それに依つてチェッコが潰れてしまふといふ端緒が開かれたのであつて、實はもつとハッキリした手を打つべきであつたと思ふのであります。チェッコの大統領のベネシュは、國際聯盟に於ては雄辯巧辭で非常に賣つた男でありますけれども、どうもその點、政治家としての資質に於て缺くる所があつたやうに見えるのでありまして、却つてこの煮え切らない政府の態度が促したやうな關係もありましたが、これに大きな拍車を掛けたのは、ニュールンベルヒに於けるヒトラーの演説であります。

ニュールンベルヒに於ては一年に一回ナチ黨の大會を催して居りますが、最初の日にはヒトラーの過去一年間に於ける業績の報告があります。これは市長が代讀するやうであります。さうして最後の日にヒトラー自身が來るべき一年間のナチの政

治的工作のプログラムに就て演說するといふことになつて居ります。

そこで何とヒトラーがこのズデーテン問題を扱ふだらうかと、これに非常な興味を集注して居りましたら、言ふ所のものは極めて簡明な言葉を使つて、ズデーテンに於ける獨逸人は我等と血の繋がりを持つて居る、これが窘められるのは見ちや居られない、といつたやうな趣旨の演說をしたのであります。

これで大體獨逸の態度はハッキリ分つたので、そこでズデーテンの連中は非常に力を得て、急にその自治運動が激化して參りました。さうしてそれから僅かに二週間餘りのうちにあのミュンヘン會議の大詰まで至つた譯であります。

その期間は非常に僅かな期間でありましたが、その間に於ける獨伊對英佛の外交折衝は、洵に火華の出るやうな抑揚變化に富んだものでありまして、歐羅巴に於ける最近の外交問題を研究する者にとつては非常に興味のある期間であつたのであります。

兎に角その僅かの期間の間に、自治運動がズデーテンの獨逸への併合運動に變つてしまつて、さうして人口の比率問題にしても、獨逸人の七十パーセントといふのがどんどん下つて五十パーセントといふことになつて、獨逸の要望するが儘にあのズデーテン問題が解決されてしまひました。

以上が大體ミュンヘン會議までの大雜把な經過であります。

そこでミュンヘン會議を終へた後、チェンバレンからヒトラーに申入れをして、今後はもうこんな武力を使つて歐羅巴に於ける國際問題を解決するといふことは止さうぢやないか、お互に話せば分ることなんだから、一つ協議に依つてやることにしようぢやないか、それはよからう、といふので、この兩人がサインした共同の聲明を出したのであります。その聲明の內容は極めて簡單で、只今申しました趣旨を謳つた譯なんであります。

けれども、英吉利としてはこの希望を現實にして行きたいといふ氣持が非常に多

分にあつたやうであります。ミュンヘンで、あんな溫和しい、英佛側から見れば殆ど屈辱的な結末をつけて、さうして一應聲明にまで漕ぎつけた。これが日本ででもあらうものなら、さぞやかましい問題であつたらうと思ふのでありますが、チェンバレンにしても、ダラヂエにしても、各々あの會議を終つて倫敦に歸り巴里に歸ると、兩國の市民は恰も凱旋將軍を迎へるが如く、これに歡呼の聲を送つたのであります。

それは何故かと云へば、結局戰爭がなくてよかつたといふ喜びの表現に外ならなかつた譯であります。

それではさういつたやうな氣持が獨伊側にはなかつたかと云ふと、羅馬でも伯林でも同じやうな氣持がありました。ムッソリニの如きは、最初は汎ゆる機會を捉へて、言葉で以て獨逸に援助を送る、といふ程度の演說以外に、彼の獨逸支援といふものは出なかつたのでありますが、彼れ此れするうちに、佛蘭西が國境に兵を集め

るといふやうな、その頃から大分眞面目になつて、兵力を一部動員しなければならぬので、彼の言ふ所も最初と違つて大分緊張した物の言ひ廻しになつて來た譯であります。それで問題自體から云へば、戰爭にならなくてよかつた、戰爭はしたくなかつたといふ氣持であることには間違ひはないやうで、まあまあよかつたといふ氣持は羅馬にも伯林にも同じやうに起つて居ります。

斯ういふ譯で、双方が戰爭したくなかつた、さうして獨逸の要望には無理もない點があるといふことがチェンバレンの常識外交に於て容認されて、それであの結末になり、これからは協議の方法に依つて行かうぢやないかといふことに一應の結末を見たのでありますが、扨て終つて見ると、もうその直後に於てチェッコ問題が先般の最終的解決への序幕を開いて居つたのであります。

それは何故かと申しますと、ベネシュは早速に辭職してしまふ、さうしてチェッコ・スロヴァキアの共產黨は解散させられてしまひました。

その以前に於ては、共產黨はチェッコに於ける一番大きな政黨でありました。コミンターンから云へば、歐羅巴に於ける赤化工作の第一線をチェッコに置いて居つた譯なんであります。それは御承知のやうに、獨逸、伊太利の赤化に一應成功したが、忽ちにして破れ、西班牙問題では、赤を援けた方が却つて藪蛇になつて西班牙から退却しなければならぬといふ立場になつてしまつた。それでその第一線をチェッコに置いたのであります。

さうして何をしたかと云へば、獨伊には一寸手をつけ兼ねるのであまり工作をして居なかつたが、英佛その他の民主主義國家の左翼に連絡を執らせて居つた。從つて共產黨がその國內に公然と組織を持つことの困難な國では、皆チェッコへ本部を置いて居つた譯であります。さうしてその左翼をして、ソヴェートの政體は決して危險なものぢやない、共產主義は要するに民主主義なんだ、その證據にはソヴェートに憲法も出來た、議會も出來たといつたやうなことで、ソヴェートが最近やつて

居つた僞裝を極度に誇張して、さうしてソヴイエト容認の宣傳を盛んにやらせ、これに色々の支援を與へたことは申すまでもない。斯樣にして民主主義國內に於ける輿論を次第にソヴェートに引付けて行き、さうして現在權力を握つて居るダラヂエ又はチェンバレンといつたやうな保守主義又は右に屬する有力者を打倒して行くといふ、大體斯ういふ政策を執つて居りました。この共產黨といふものが忽ちにして解散させられてしまひ、關係者はドンドン波蘭その他へ逃げ出してしまひますし、チェッコの外務大臣が就任すると、その椅子に腰を下ろす前に、ベルヒテスガーデンと伯林を訪問して、さうしてヒトラーとリッベントロップから旨を受けて歸つて初めて就任するといふことで、獨逸のチェッコ・スロヴアキアに對する把握力といふものは殆んど政治的に完全に出來上つたと言つてもよいやうな情況になりました。

ズデーテンを取られてしまへば、チェッコ・スロヴアキアの行く道はそれ以外に

はありません。何となれば、ズデーテンはチェッコ・スロヴアキアの脂身を成して居るので、その資源、工業力、交通力等の大部分はズデーテンに集中して居つた譯であります。そこでその以外に行くべき道はなかつたのでありませう、兎に角協議の方法に依つてと言つて居る間に、獨逸は英佛への協議を俟たずして、どんどんチェッコに對して力を伸ばしたと斯ういふ情勢になつた譯であります。

ところがその當時から間もなくのことでありますが、洪牙利が併合を宣言したカルパチアン・ルテニアに、獨逸方面から非常に有能な一人物が送られ、それに色々な方寸を授けてやつたやうであります。その方寸といふのは、伯林の政府並にナチ黨の中に、ある關係機關の作用する筋に添つたもので、これに附して右人物を送つたやうであります。

この特殊機關が早速に協力したのがソヴエートに對するウクライナ獨立建設の運動であります。ソヴエートの方では初め氣がつかないで居つたところが、この運動

が激しくなつて來た。そこであわてゝ莫斯科から人を派して、ウクライナに於ける八つの放送局を動員して、強力な電氣で獨逸の宣傳を打消す、或は獨逸語、チェッコ語に依る反對宣傳をやるといふやうな工作を始めたのでありますが、これが最初の彼等のプログラムであつたやうで、去年の十一月の中頃からの出來事であります。

どうもこの連中の謀略と見えるのでありますが、間もなく波蘭に於て波蘭の人口の四分の一强を占めて居るウクライナ人の中に、ウクライナ自治運動の問題が起りました。ウクライナ人に屬する國會議員が國會に自治法案を提出するといふ動きを執るやうになつたのが十二月の月であります。

そこで波蘭は驚いた譯です。ミユンヘン會議の直後に於て、御承知の通り、波蘭は獨逸並に伊太利の好意に依つてチェッコ・スロヴアキアの一部分に屬して居つたテッシエンの地方を獲得し、洪牙利は南方のマジャールの住んでゐるジグザグにな

つてゐる國境地帶に於て幾つかの地方を得た譯であります。それに氣をよくして波蘭と洪牙利で共同國境を作らうぢやないか、さうして獨伊の承認を得ようといふ所まで來てをつた、それが獨逸が承知しなかつたので出來なかつたのであります。さうしてその代りに獨逸はそれに宣傳機關を置いた、それでテッシエンは、どつちかと云ふと、波蘭よりは獨逸の方に寄つて參つたのであります。

波蘭の方の立場から云へば、獨逸とソヴイエトといふ二つの强國の中に挾まれて居るのであるから、どちらへも附かないやうに、又どちらからも侵入されないやうにといふ、これが最上の希望なんであります。從來とてもソヴイエトと始終喧嘩をやつてをり、子供の喧嘩みたいな係爭事件の引續きなんであります。その中に在つて、兎に角ソヴエートとあまり大きな衝突をしないやうにと、努めて親密に心掛けて來て居つたやうであります。それは言ひ換へれば獨逸からも窺はれないやうにといふことを意味して居つた譯であります。それが、獨逸の方に附いて行くと相當妙

味があると斯う見て來たので、大分獨逸の方に寄つて來たやうであります。その情況は、關係國の大使の東西に於ける動きに依つても窺はれました。そこへ持つて來て、獨逸が突如としてウクライナ人の支援を始めた。そこで波蘭は吃驚したのであります。

で、波蘭側に云はせると、獨逸は何分にも宣傳謀略が强すぎる。リガから東プロシア、プラハ、ウキーンと、斯ういふ線をズッと引いた所には反波蘭の宣傳網が張られてをつて、洵にえげつない宣傳をする。そのために波蘭の學生達が非常に憤慨して騷ぎを始めたのだといふやうな言ひ方をして居りました。

併しまあその邊のことは別と致しまして、波蘭と獨逸との間が甚だ面白くないといふので、二月になつてチアノが波蘭に行つたことがあります。當時一般への觸れ出しは、ただ親善のために波蘭を訪問するのだといふことでありましたが、一部ではこれは何か情報を摑みに行つたに違ひないといふことも言はれて居りました。と

ころが後でよく考へて見ると、伊太利が獨逸と波蘭の間に立つて何か緩和しようといふために行つたらしく考へられるので、それはその後に於ける伊太利の動きを見て思ひ合せると、どうもさう考へざるを得ないのであります。

ところが、このチアノがワルソーを訪問してゐる丁度その時に、學生の猛烈な反獨運動が起りました、その學生の背後には猶太人がをり、猶太人が資金を供給してをつて、英佛の出先が相當活躍したらしく見えるのであります。猶太人が資金を供給するのに不思議はない譯なんで、獨逸が猶太人を逐つたことは御承知の通り。殊に獨逸がズデーテンを引取つた直後に、猶太人が皆逃げ出してしまつたので、ズデーテンのあの大きな產業を動かして居つた猶太人を失つて、獨逸はその當座は一寸當惑したやうに見えた程でありました。この連中がやれといふやうな調子で資金を供給したのは何の不思議もないと思ふのであります。

兎に角斯樣なことでだんだんと波蘭と獨逸の關係は惡くなつて參りましたが、こ

の事は夙くにヒトラーは氣がついて居つたやうで、今年の一月五日に波蘭の外務大臣ベックをベルヒテスガーデンに呼んで懇談を遂げて居ります。

ヒトラーは極力ベックを慰撫したのでありまして、波蘭がソヴエートとどういふ關係にあらうとも、獨逸は決して波蘭の脅威とならないやうにするから、ダンチヒの問題もコリドールの問題も心配して呉れるな、ウクライナ運動といふものも決して領土的な野心があつてやつて居る譯ぢやない。ソヴエート・ウクライナに對しても領土的野心はないのだ、又波蘭に於けるウクライナ人の問題は國內問題だ、決して御迷惑になるやうにはしないから、と言つて極力辯解もして慰撫した譯であります。さうして殊にテッシエンは事實的見地から見てこれは當然波蘭に行くものと思つてお世話したのだが、これは嘸ぞ喜んで下さるだらうといふやうなことまで話した。ベックの方でも、波蘭としても獨逸と親善關係こそ結びたいけれども、決して喧嘩をする氣持はないのだ、但し防共協定に入ることは、これは困難だから御諒承

を願ひたいといふことで、大變調子の好い話で別れた譯であります。

ところがどうもその後一向その通りに行かないで、だんだん獨逸の波蘭に對する謀略なり宣傳が强まつて來たので、波蘭は非常に憤つて居るやうであります。

左樣なことで波蘭は甚だ心許なく思つて居る所へ、ソヴエートから誘ひが掛つて參りまして、豫てソヴエートと波蘭の間に成立して居る不侵略條約の再確認をしてやらうぢやないかと言ふので、これは結構だといふ譯で再確認をやつたところが、その發表問題に就て波蘭は極力反對したのであります。けれども、どうしてもソヴイエトでは發表するといふことで押へつけて、到頭再確認發表といふことになりました。さうすると獨逸の方では、波蘭は甚だ怪しからぬと斯うなつて來て、又一段と兩國の關係を惡くしたのであります。

ところでミュンヘン會議の直後、獨逸は、一方に於てはズデーテンのために、その原料を賣る、或は製品の販賣といふこともあつたらうと思はれますが、フンク經

濟大臣を、殆ど日にちを置かずに、土耳其に派遣して、さうして一億五千萬馬克のクレヂットの設定を行ひ、獨逸の機械と土耳其からの農產物との交換を契約致しましたが獨逸のやるバーターは、世界市場に於ける價格を全然無視してしまつて、双方一定價格で取引すると斯ういふ行き方なんであります。又フンクは、その歸りに、ユーゴースラヴイアとブルガリアに寄つて同じやうなクレヂットの話をつけて歸りましたが、それから波蘭とも早速にクレヂットの話が成立して、三千萬馬克が僅かながらも出來たといふやうな譯で、獨逸は經濟的な方面に拔かりなく手を打つて居つたのであります。

英吉利は、獨逸の東歐羅巴方面への發展を專ら經濟發展にして行きたい、又さういふ風に扱つて行きたいといふ希望が非常に多かつたやうでありまして、會議の直後に於ても議會に於てチエンバレンが、獨逸の東歐羅巴への經濟發展はこれは自然だ、さうして英吉利としてもこれは容認すべきであり、又これは英吉利の經濟的利

益と矛盾撞着なく出來ることなんだ、といふやうな辯護的な說明を加へて居ります。又當時貿易局長かなんかの先生は、何と云つても英吉利の財力と獨逸の財力とでは比較にならないのだ、縱しんば競爭になつたところで、結局の勝は英吉利に在るのだから心配するには及ばぬ、と斯ういふ風な說明まで加へて居ります。兎に角獨逸の發展を平和的な經濟的發展に止めて行かう、又事實さうなんだと斯樣な說明振りが英吉利の政府に依つて行はれて居つたのであります。

ところが、さういつたフンクの活動の外に、既に早くも波蘭には效果的な手が動き、そのために非常に逼迫した狀態が生れ來ました。のみならず、ゲーリングが羅馬尼に赴いて、この三月の半ばに出來上つたスロヴァキアの獨立、それからチェッコの保護領設定の後に獨羅の間に締結された通商條約の、その下拵へは、既にこのゲーリングの訪問に依つて出來て居つたのであります。羅馬尼に對する政治的な壓力を利用して、そこまで手を伸ばして居つた譯なんであります。

斯樣な次第で、英吉利はやきもきしながらだんだん獨逸が政治的に擴がつて行くといふことを見て居つたのであります。

それから丁度三月の初め頃までの一ヶ月半ばかりの間、一時獨逸の政治的發展が一寸緩和されたやうな姿が見えたことがあります。それに先だつて昨年の十一月、伊太利の方を見ますと、恰も獨逸のズデーテンの後を承けて、バトンを獨逸から伊太利に渡したかと思はれるやうな一つの動きがあつたのであります。

それは昨年の十一月下旬に、チアノが議會に於て演說をしました。例の如くに舊ローマン・エンパイアの再建設といふ趣旨の演說であつたのでありますが、その際に議員の中からコルシカ、チュニスといふ聲を擧げました。それから議會外に於ける演說も、民衆が非常に騷ぐ。さういふやうなことで今度は伊太利の番になつて來て、愈々伊太利がコルシカとチュニスへ攻擊の焦點を向けたなと、斯う思はせたのであります。

そこで佛蘭西では非常に吃驚してボンネが議會で力み返つて、如何なる事があらうとも、伊太利に向つて尺寸の土地も與へるものではないと言ひ切つて居ります。

それでダラヂエがコルシカとチユニスを早速訪問して、これに佛國西本國に對する提携を求めるといふ手を打つ、伊太利は伊太利で、ムツソリニがサルヂニアに行つてそこで大演說をするといふやうなことがありました。

併し、これらの經緯があつたのではありますが、伊太利はチユニスの國境方面に若干兵力を增す、佛蘭西も本國から若干の兵力をこれに割いたといふこと以上には緊張しないで濟んだのであります。

斯樣な次第で、獨逸の發展運動も今申したやうに、一時一寸緩和されて、歐羅巴の國際的關係が一つのエア・ポケツトに入つたといふ感じを與へたことがあります。

ところが丁度その時期になつて、六月一日モロトフの演說の中に謳つて居つた獨

逸とソヴイエトとの間の經濟協定が表面に出て參つたのであります。

これは內容を申しますれば、獨逸から二億馬克限度の機械をソヴイエトに供給する、但し武器その他の軍需品は一切やらないといふ斯樣な說明ではあつたが、兎に角機械を供給する、それからソヴイエトからは木材、石油、マンガン、植物性の油粕等を一億五千萬馬克まで獨逸に輸入するといふことで、その差額の最高五千萬馬克といふものは何も言つて居なかつた。これは妙味のある所で、或はソヴイエトの機嫌を取つて居る點ではないかと思はれるのであります。さうして獨逸は非常に乘り氣で、シユヌラーといふ獨逸外務省東歐羅巴課の課長をワルソーから莫斯科へ送るといふ所まで來て、これが表面に出たのでありますが、これは決して政治的關係はないのだからと極力辯明をして居るのであります。

さうすると今度は、伊太利とソヴイエトとの間に經濟話が始まり、これは十億リラで同じやうに大體機械と原料品との交換の話であります。どうも變な話だと思つ

て居ると、更に獨逸と亞米利加との間にも同じやうなクレデットの話があり、これは綿、小麥、ラード等で、これ亦相當大きな金額になるものでありましたので、どうも獨逸は頻りと嚙んで吐き出すやうに言つて居りましたが、さういふ風で獨逸はさういつた經濟協定をソヴイエトとやる。伊太利もやる、又獨逸が極力排斥した亞米利加との間にもさういふ話が出て居りました。

すると今年の一月三十日に國會で行つたヒットラーの演說の中に、珍らしく經濟問題に就て所謂「持てる國」と「持たざる國」との話を引張り出して來て、獨逸は輸出をしなければ生きて行けない、輸出をしなければ原料も買へない、食料も買へない、それを許さなければ獨逸の繩張りを擴げるよりほか仕方がない、ところが繩張りを擴げることも困難だ、さうなつたら死ぬよりほかはないのだ、だから獨逸の經濟の困難を救ふべく獨逸商品の輸出路を與へた、といふやうな趣旨の演說をして居ります。

さうすると、これが非常に手早く倫敦でリアクションを起して、チエンバレンが、獨逸の言ふことも尤もだ、併し獨逸はそんな要望があるのなら何故もつと具體的の何かの提案をしないのだ、軍備縮減問題とまで行かなくても、若干の制限問題でも具體的提案をしたらどうだ、と斯ういふ風なことを言つて居ります。

當時、借款話は十分に分らなかつたので、何のためにこの經濟話を出したのかといふことに多少奇異な感じを懷かせられたのでありますが、繫ぎ合せて見ると、どうもさういふ事實がある、さうしてそれには英吉利は餘程獨逸のために骨を折つて居り、ソヴイエトとの間の經濟協定にも種々斡旋の勞を執つて居るらしく見えたのであります、又英吉利は、それに就て獨逸のために貸付金の肩替りをしてやる、割引もしてやるらしいといふ、この邊も眞實かどうか分りませんが、兎に角さういふやうな情報が入つたので、さてこそ獨逸は溫和しくなつたのだなといふやうな感じが致して居つたのであります。

さうするうちに三月の十四、五、六とこの三日の間に、突如として、先程申したやうな、スロヴアキアの獨立宣言、次いでチエツコの保護領への編入、洪牙利のカルパチアン・ルテニア併合宣言といふ事實が起つたのであります。

斯ういつた態度に突如として出たといふ理由が甚だハツキリしない點があります。どうも思つたやうに獨逸の經濟的要求に對して滿足を與へなかつたやうな關係がありはしなかつたか。例のシヤハトが獨逸政府が猶太人を窘める、丁度あの前後に、猶太人問題を緩和することを條件にして、倫敦で金融上の便宜を圖つて貰ひたいといふ話を持つて行つた事實もあり、それがどうもうまく行かなかつたので、シヤハトが責任を負つて罷めたといふこともあつたやうで、何かそんな樣な關係があつたのではないかと想像されたのでありますが、兎に角表面に現れた事實は、左樣な譯なんであります。そこで驚いたのは波蘭なんです。波蘭は、どうも獨逸に對して甚だ信用が措けなくなつて來たと思つて居るところへ、スロヴアキアまで獨逸は

式正に伸びて來てしまつた。斯うなると波蘭は非常な危險を感じなければなりません。

波蘭が非常に驚いて居る所へ持つて行つて話を持ちかけて來たのが佛蘭西であります。佛蘭西が波蘭に、英吉利との間に一つ相互の援助協定をやつたらどうだと、これは初めから持つて來たのかどうか分りませんが、兎に角その筋の話を持つて來たのであります。

英吉利は、波蘭の力、又波蘭の決意、殊に波蘭の軍力といふものに對して、佛蘭西ほどの精しい計算をして居なかつたやうで、佛蘭西から言はせれば、甚だ以て認識不足だといふことになる譯でありますが、兎に角佛蘭西が英吉利を內面的に指導してそれで英吉利が決意をして、波蘭に話を持ち込んで行く。又一方、その話の中へは亞米利加の歐羅巴に居る大公使が大分入つて居つて、この連中が斡旋した結果、波蘭も愈々決心を固めるといふことになりました。

そこで三月三十一日に、チェンバレンが議會に於て波蘭の安全保障をやるのだといふ演說を發表しました。この政策は英吉利の大陸政策の上に劃期的な一つの變更を來した譯なんであります。それは斯ういふ言葉まで添へて居るのであります。——大陸に對しては責任も負はぬ、約束もしないと。それでまあ大陸に在る色々な勢力の間にバランス・オヴ・パワーを作つてやるといふ行き方に非常な變化を來したといふことには、これはチェンバレンが言ふが如く、間違ひないと思はれるのであります。

それで四月三日に、ベックが倫敦に呼ばれて、チェンバレンと直き直きに話をして居ります。

ベックがワルソーを出る時に、獨逸が非常な壓力を加へました。それにも拘らず彼は出て行つて、話はどんどん進んで、相互援助條約にまでなつたのであります。

この相互援助條約になつた一つの大きな理由は、波蘭が國家的體面を維持することを強く主張し、一方からだけされるのは嫌だ、やるなら相互的にやりませうといつた話があつたやうであります。又その他、混み入つた話が大分出て居ります。例へば波蘭と羅馬尼のこの二ヶ國の同盟といふものは元來ソヴイエトに向けられて居るものなんですが、それを廻れ右をして、獨逸に向けたらどうだ、といふやうな話も出て居りますが、これはベックが斷つたので成立しなかつたのであります。それから又、一つソヴイエトを入れて、獨伊包圍陣の一翼を固めたらどうだといふ話も出たやうで、これもベックは斷つて居ります。

左樣な譯で、英吉利の要望する所が悉く容れられた譯ではありませんが、兎に角獨逸の東進政策に對する包圍陣の據點を波蘭に置くといふことに就て、このチェンバレンとベックとの會談は非常に大きな役割を勤めたのであります。この點に於ては英吉利の外交上の大きな成功が齎されたものと見てよいのであります。

それだけに、この點、獨逸は外交上非常に大きな失敗をしたと云つてもよいと思

ふのであります。折角寄つて來て居つた波蘭も到頭英吉利の方へ押しやつてしまつた。のみならず、獨逸が發展運動を計畫するに際して最初立てられた根本方針といふものは何であつたかと云へば、西へは絶對に進まない、西の方は軍事外交共に防禦で、英吉利とも喧嘩しない、佛蘭西ともやらない、さうして力を專らにして東へ進めるといふことであつたのです。ところが、この波蘭問題にひつ掛つて、端なくも到頭これに英吉利を誘つて來て、さうして英吉利をして大陸政策の上に一大轉換をさせるといふ所まで持つて來た。形勢は自ら玆に立到つたのであります。

何故さういふことになつたかと云へば、どうも獨逸の外交のやり方を見ると、柔軟性に缺けた點がさうさせたのだとも思はれるのであります。

例へば、洪牙利の如きにしても、洪牙利は何としても獨伊樞軸に入る以外に行く道はないので、洪牙利の農產物の輸出の三分の二は現在の獨逸へ向つて居る。さうして洪牙利は農產物を除いては他に目ぼしいものはない。地形的に見ても防共樞軸

に入るほかはない。こゝで洪牙利も亦、ソヴイエトから非常に冷たい眼で見られ、こづき廻されたにも拘らず、思ひ切つて防共協定に入つた譯なんでありますが、この洪牙利人がどうも獨逸に懷かないといふ氣味があるのであります。

これが英波の間の相互援助條約の出來たことに非常に大きな關係を持つて居ると思ふのであります。

それなら獨逸ばかりが不備な點を持つて居るのかと云へば、さうでもないので、英吉利も佛蘭西も同じやうな惱みを持つて居るのであります。それは何かと云へば、どうも巧いことを言ふけれども、やつて呉れるのだかやつて呉れないのだか分らないといふ不信賴の念を、東歐羅巴からバルカンの小さい國々に持たせて居る、卽ち信を國際的に立てるといふ點に於て缺ける所がある。これが英吉利の、又同時に佛蘭西の、大きな缺點であつたやうに思はれます。

斯樣に双方とも數へ立てれば缺陷がある譯でありますが、兎に角さういつたやう

なことで波蘭は獨伊包圍陣の東に於ける據點になつてしまつたのであります。

茲で一寸ベックの話でありますが、私はベックといふ人は非常に興味のある人物ではないかと密かに思つて居るのであります。彼の語る所は非常に率直であり、嘘はありません。さうして行ふ所は、非常に實行的であり、言葉と行ひとの間に間隙が非常に少い。而も尙ほ波蘭の國家のために圖つて忠ならんとする態度は、實に見上げた所があるのぢやないかと思はれるのであります。最近、彼の所謂强硬政策、積極政策が波蘭の國内でも相當評判が好くて、數千通の激勵電報が舞ひ込んで居る。さうすると先生は、その電報を机の上に叩きつけて、彼等は波蘭の實力を知らぬ、彼等は波蘭の國策を知らぬ、と言つて憤慨したさうであります。褒められて非常に憤慨して居る、これは相當の人物ぢやないかと思ふのであります。

それで波蘭は、現在兵力を動員して居ること七十萬。元の大統領も、亡命して居つたのが、國へ歸つて來ましたし、波蘭に於ける唯一の優れたる軍略家と云はれた

元の參謀總長も、亡命して居つたのが、歸つて來るといふやうなことで、だんだん人心の結合も出來て來まして、殊にウクライナ人があぶないといふので、これは一切軍隊へ動員せずに、これに對して警察的な彈壓を何時でも加へ得るやうな手筈を取つて居るといふやうな譯で、相當に緊張して居るやうであります。ですから、この波蘭を英吉利が獲得したといふことは、その程度に於て意味合のあるものと見て置かなければならぬと思ふのであります。

扨て次は、その南に在る羅馬尼でありますが、これはダニューブの河口を扼し、そこには大平野が開け、石油の豐かな資源を包藏して居る非常に良い國なんであります。併し政治は甚だよろしくなくて、軍隊の如きも、將校は非常にハイカラな風をして居るが、兵隊は裸足で居るといふやうなことで、國王のカロルは、政治家ではあるけれども、君德に於て缺くる所なきやといふやうな疑ひを持たれる譯であります。

現在羅馬尼は、獨逸と英吉利と兩方へサーヴイスするといふ方針を執つて居ります。

獨逸との間には、羅馬尼の天然資源、石油その他の鑛山の開發、或は農事の改良といふやうなことにまで合辨組織を採用し得るやうな趣旨の通商條約が出來て、最近穀物と石油を一萬トン宛獨逸へ送ることになつたやうで、さういつた調子で獨逸と良好關係を作つて居るのであります。

又他方、石油問題では豫てより獨逸が手を附けると見て、英吉利の投資を頻りに誘つて、昨年の十一月中旬、國王自身倫敦を訪問してこの話を持出して居るやうな次第であります。それで英吉利から、實はお前の國と希臘とを安全保障をしてやるのだが異存はないか、といふ話を持込んで來ると、私の方は全然知らない態でやつて貰はないと困る、知らないことにして貰ふならよろしい、と斯ういふ返事を得た。そこで英吉利が例の安全保障をやると、羅馬尼は直ぐに、安全保障を敢て拒む

譯ぢやないが、隣邦獨逸、洪牙利との親善關係は益々進めて行く、といつたやうな聲明をやるといふ、甚だ煮え切らぬ態度なんでありますが、英吉利からの黒海に於ける羅馬尼の海軍建設の資材の供給に對しても、これを頂戴致しませうといふやうな返事をして居るやうであります。最近、リースロスが參りまして、經濟援助の話が出來て、五百萬磅の借款が成立致しました。羅馬尼の方から云へば、どうもその五六倍要望して居つたやうで、これつぱかりぢや仕樣がないといつたやうな不平もあるやうでありますが、兎に角英吉利の經濟援助、また軍需資材の援助といふものも一方に受けて居るのであります。又加ふるに一方的保障の宣言まで引受けた譯なのであります。

斯樣な次第で、富源を包藏して居りながら、國力甚だ微弱にして、獨伊樞軸と英佛樞軸の兩方にサーヴイスをして居る羅馬尼は、歐羅巴の國際情勢の上から見て、玆に今後非常な危險を導く理由を持つて居るのぢやないかと思ふのであります。

更に南へ下つて、土耳其でありますが、土耳其は從來ソヴイエトと獨逸と英吉利と、この三方に緊密關係を維持して居つたのであります。

最近の貿易關係から云ふと、獨逸が斷然群を拔いて居ります。さうして一億五千萬馬克のクレヂットの出來たのも先程申上げた通りであります。

ところが、借款關係から申すと、何としても英吉利からの借款を最も賴りにして居るやうであります。茲一年に滿たない期間に相當の借款を得て居るやうで、大きいものになると一千萬磅の借款も出來て居ります。それで常に土耳其の經濟、交通、軍事といふものの建設に英吉利の財力的の援助を多分に仰いで居ることには間違ひないのであります。

ソヴイエトとは、直接に長距離の共同國境を持つて居りますし、何としても武力的な壓力は强く感じて居るのであります。共產主義には反對して居りますけれども、ソヴイエトとは今日までずつと良好關係を維持して來て居ります。ちよいちよ

い共產主義宣傳が國內で行はれ、先般も士官學校の生徒が大分赤になつたといふので大騷ぎをしたことがありますが、兎に角良好關係を保つて居ります。

それで例の土耳其の大統領ケマル・アタチュルクが死んだ時なども、この三國が競つて大きな特派使節團を派遣して葬儀に列するとか、又儀杖兵を派遣するとか、軍艦を派遣するとか、非常に賑はして居りましたが、皆土耳其に野心があるのであります。

この土耳其がどういふ態度を兩樞軸に對して執るだらうかといふことが非常に興味のある問題であつたのでありますが、何としても背後から武力で以て脅威して居るソヴイエトの意嚮を無視しては兩樞軸何れへも行けないだらうといふことが略々窺はれたのであります。そのソヴイエトが何を土耳其に要望したのかと云へば、中立といふことでありました。ソヴイエトとしては甚だ柄にない要望であつて、土耳其が回教國でなくなる、回教が土耳其を去るといふことは、ソヴイエトの堪へ得ざ

る所なり、といつたやうな聲明を出したこともありますが、回教が土耳其から去るといふことが何も辛いのぢやなくて、何れの樞軸が土耳其に入つて來ても困るといふことを意味して居ること勿論で、英佛の艦隊がダーダネルスの海峽に入つて來て吳れても困るし、又獨逸の武力權力がグングンとコンスタンチノープルに迫つて來ても困る、と斯ういふことなんであります。

その土耳其が最近になつて到頭英佛樞軸に入つてしまつた。何故だらうか。

土耳其と希臘との間には非常に緊密な關係があります。希臘は御承知のやうに現在獨裁的な政治が行はれて居りますが、その獨裁者が個人的に土耳其の政治家に對して相當のインフルーエンスを持つて居ります。それで同じやうな方針で對處しようといふ話合が行はれて居つたやうでありますが、その希臘が最近伊太利のアルバニア占領に依つて非常に脅威を感じて來たのであります。アルバニアを占領したために、伊太利は、希臘の主要都市に二十五分乃至四十分で飛行機で幾らでも飛んで

行ける。これはチアノの自負する所でもありますし、何かと云へば、わけはないのだ、希臘にしろ、ユーゴースラヴィアにしろ、その他のバルカンの國々にしろ、正に指呼の裡に在るのだ、何時でも我々は思ふが儘に料理が出來る、といつた氣構へを示して居ります。これは希臘に取つては非常な脅威であつたに違ひないのであります。と云つて、希臘は國は小さいし、力は無いし、去就を俄かに決するわけには行かぬといふので、沈默これ守つて居りますが、土耳其がその態度を決定する上には、この希臘との間に話合があつたものと見なければならぬと思ひます。

土耳其と伊太利は、これまでとてもあまり仲は良くないのであります。小亞細亞の西海岸、卽ち地中海の東の涯の地方に、伊太利人の商賣人がだんだん手を伸ばして勢力を張つて行く、これが土耳其に取つて相當好ましからざる現象なんであります。そこへ持つて來て伊太利の海軍と空軍が一緒になつて地中海を我が物顏に振舞はうといふ關係がある譯で、英吉利の海軍は絕對優勢にしても空軍が足りない。斯

ういふことが余程手傳つたものと見てよいのでありますが、到頭土耳其は英吉利との間に共同宣言とまでなつたのであります。これは共同宣言にして、相互援助の同盟條約まで入らうといふことになつて居ないやうでありますが、ただ問題はソヴィエトがどう出て來るかといふことを待つてゐる譯であります。

そこで東地中海といふものを睨んで見ますと、洵に重大な關係のある土耳其が英佛樞軸の方へ入つて行つたといふことは、これ亦、獨伊樞軸から見れば、何としてもこれが成功だとは言へないといふことになると思ふのであります。

斯くして英佛は、北に於ては波蘭、南に於ては土耳其を據點とした獨伊包圍線を兎にも角にも作り上げてしまつたのであります。その間、希臘、羅馬尼に對する保障の問題とか、或はブルガリアの問題とか、色々細かい問題はありますが、兎に角さういふものが出來上つてしまつたのであります。

ところが御承知の西班牙に於ては、フランコが統一を完成した後、何れの側に入

るだらうといふことは、必ずしも單純には觀側出來なかつたやうな事情があつたのであります。

それは何故かと申すと、彼の陣營内にも英佛派が相當に居るのでありまして、作日までの友人は違ふといふことを平氣で言つて居るので、西班牙のあの長い年月に亘る内亂の創痍を癒し今後の再建設をするためには、相當の金が要る、それは英吉利へ持つて行くほかはない、といふのがこの連中の論據であります。

どうなるだらうと思つて居りましたら、兎に角防共協定に入つてしまひました。

ところが、そのお隣りの葡萄牙が亦西班牙と大分喰付いて來ました。これは英吉利に取つては非常に嫌なことなんで、英吉利は、葡萄牙を何とかして西班牙から引離して、英吉利の手に單獨にこれを保持して行かうといふために、最近非常に努力して、汎ゆる手を使つて居るやうであります。それはジブラルタルを擁護する見地からも、又阿弗利加を廻つて印度に出る所謂インピリアル・ウエイスを保護するた

めにも、どうしても葡萄牙を手に入れたい、といふ希望から來るものと思ふのであります。葡萄牙も、小國のことで、これも何れに態度を決しても身の破滅の因といふので、はつきりして居りませんが、共産主義反對といふことは、從來とも明瞭に謳つて居ります。それで西班牙とは離れることが出來ない程度に今なつて居るやうであります。

さういふ譯でイベリア半島には獨伊の勢力がグッと伸びて居る。而も西班牙は、モロッコの西の部分、卽ちジブラルタルに向つた地方に大分增兵して居る。これはジブラルタルを窺ふといつたやうな含みで兵力を增したものと見えるのであります。左樣なことで、西班牙のこの態度は、英吉利に取つては、かなり氣味の惡い態度であります。又佛蘭西から見れば、獨伊西の三國から迫られて居つては、甚だ安閑として居られないと思はれるのであります。

そこで今日までの情勢から申せば歐羅巴に於ける兩樞軸の體制に於て、英佛の强

味は、波蘭と土耳其を獲得して、兎にも角にも獨伊包圍の陣形を一通りでつち上げたいといふ點でありますし、又獨伊の側に於ては、その點では失敗をしたが、イベリア半島を獲得して英佛に脅威を與へて居る點が强味だらうと思ふのであります。

爾餘の國になりますと、北歐の丁抹、或は瑞典、諾威、芬蘭、それからバルチックの三國などといふものは、結局落ち行く運命は中立を維持するといふ點に在るものと思はれます。その邊の折衝問題なども申上げると管々しいものになりますが、結局實質的に申せば中立を維持するといふことになると思ふのであります。

和蘭と白耳義は獨逸に對して非常な脅威を今は感じて居ります。殊に和蘭が非常にビクビクして居ります。と申すのは、白耳義の港は獨逸側が利用するには少し小さ過ぎるので、その點和蘭の方が手頃であり、そうして御承知の通り、獨逸の計畫として、ラインとダニューブ、エルベ、オーデルのこの四つの河を繫いだ大運河を作つて行かうといふので、ハンブルグから北海まで千噸以上の船で行かうといふこ

とになると、獨逸の船が海を廻らずに河筋を傳つて和蘭に出て來るといふことも考へられるので、和蘭は頻りにこの點を氣にして居るやうでありまして、そのために、柄にもない大きな軍艦を造らうといふやうな計畫も最近發表して居るやうであります。白耳義は出來るだけ兩樞軸から安全保障をして貰ひたい、それにはあまり先走つた兵力的の動きをしない方がよいといふので、國境方面へ出す兵隊の數なども非常に少く出して、注意深く行動して居ります。

それから御案内の永久中立國である瑞西すら、どうも今後果して永久に中立を維持出來るや否や、大分國内の人自身が不安を懷いて來るやうになつて、英佛からの安全保障に對して敢て反對でない意嚮を示して居るやうでありますし、これも内密に藻掻いて居るだらうと思ふのであります。さうするとこれは獨伊に取つては、一方的な保障といふことは、必要の場合軍隊の瑞西通過といふことには好い口實になるだらうと思ふのであります。それでこれ亦從來の如き國際的地位が保持出來るや

否や、非常に怪しい立場になつて居ると思ふのであります。

これを要するに、歐羅巴に於ては、從來大小の國が分立して居つて、さうして各々主權を以て最高なりといふ氣構へで居つたやうな國際情勢が破れて、玆に二つの樞軸に分れたので、弱き者は今後の政治情勢の如何に依つてその去就を決するほかないといふやうな暫定的な中立姿勢を執つて居る、斯ういふ情勢になつて居るのが大體の歐羅巴の現況だと思ふのであります。

ところで、獨伊の歐羅巴に於ける要望に就て、これは最初にも一寸申上げましたが、この兩者の間にどういふ風な調和點が確定されて居るか、甚だ明確を缺くのでありますが、表面に現れた事實を見ますと、獨逸は何としても東へ東へ、BBBの三つを連ねる一つの地域に覇權を立てる、ソヴイエト・ウクライナを以てウクライナ運動の據點にするといふので、どうも方向は東に向つて居る。伊太利は舊ローマン・エンパイアの再建といふことで、從つてその發展の主な方向は地中海並にスエ

ズといふことになつて居るのでありまして、それから先のことは、少し亞細亞の方にも關係を持つて居りますが、どうもそこまで考へる必要も、目下の處はないかと思ふので、先づその邊で繩張りを分けて居るのぢやないかと思はれるのであります。

併し、前々よりヒトラーの演說の中にもよく現れますが如く、獨逸は植民地の回復を除いて領土的野心は持たぬ、植民地だけは何と云つても返して貰ふのだ、といふことをハッキリ述べて居りますし、又一方伊太利の希望する所を達成せしめるためには、北阿弗利加に於ける歐羅巴の植民地に非常に大きな變化を與へなければならぬといふことになります。この植民地に對する要求、獨逸の舊植民地の回復といふことは、又同時に植民地の再分割といふことに容易に轉換し得ると思ふのであります。

現に昨年の十一月、南阿聯邦のピローといふ國防大臣が、阿弗利加の植民地再分

割案を携へて、倫敦、伯林、巴里、ブラッセル等を訪問して歸つたことがあります。倫敦ではこれはかなり鼻撮みにされたやうで、伯林や巴里へ行つて貰つては困ると言はれたが、それを押切つて出掛けたやうであります。この案は實際問題としては何等意味を成さなかつた譯でありますが、少くとも南阿聯邦の國防大臣が阿弗利加の植民地再分割案を携へて歐羅巴へ行つたといふ事實は、これは見逃すべからざるものだと思ふのであります。

目下阿弗利加には獨立國は一國もなく、阿弗利加大陸は全部歐羅巴の植民地で、謂はば歐羅巴のために附屬の菜園のやうな形になつて居ります。この植民地の再分割問題は、來るべき何れの時機に於てか、これが現實の政治問題になつて來ることがあるだらうと思はれるのであります。從つて歐羅巴に於ける兩樞軸の對立は、歐羅巴に於て諸般の問題を惹き起すと同時に、これが何れの時機にか、阿弗利加に伸びて、阿弗利加と歐羅巴をひつくるめた地球に於ける問題に擴大されるだらうと

いふことが想像される次第なんであります。

それでまあ歐羅巴の大體斯ういふ風な情勢に在る、この情勢と、亞米利加洲に於ける二十一ヶ國の連帶體制の次第に出來上らんとしつつある情勢と、亞細亞に於ける今日の情勢と、斯ういふものを皆引較べて見て參りますと、そこに我々日本の亞細亞に於ける大きな使命といふものが自然に分るやうな氣持が、私自身には致すやうな次第なんであります。

時間が大變長引いて參りましたので、途中ではございますが、この邊で失禮させて戴きまして、極東方面の問題に就ては、御質問を戴いた折に申上げることに致します。

（昭和十四年六月二日）

版權所有

昭和十四年七月廿九日印刷
昭和十四年八月二日發行

危機の歐洲

定價金拾錢

著者　河相達夫
發行者　東京市麴町區六番町三番地四　長谷川武夫
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二　若林吉郎兵衛
發兌　日本青年外交協會出版部
東京市麴町區六番町三番地四
電話九段(33)二九八三番
振替東京八三五七三番

大日本印刷株式會社印刷

世界週刊

毎週一回土曜日發行、菊一倍半判 二十頁

定價 金十錢（送料五厘）

會員募集

次の時代を暗示する颯爽たる編輯陣!!

祖國を世界史的に前進せしめよ、それには先づ世界を知り、世界的規模に於ける日本の立場を正しくはつきりと認識せねばならぬ。「世界週刊」は刻々に變動する世界情勢の適確なるウイークリイであると同時に、併せて協會獨自の主張と見通しを加へて日本の正しき進路を指示せんとする。日本の立場を正しく把握することによつて吾々は今祖國を世界的に押し進めねばならぬのだ。諸君よ！ 一切の懷疑と怯懦を捨ててこの新時代のスクラムに參加せよ！

（會費入會金共一ケ年分五圓）

會員には種々の特點あり、詳細なる會員規定は御申越し次第速刻御送りします。

戰時文化叢書

新文化創造の戰士たれ!!

第一篇 蘇聯民衆と社會 丸山政男著
第二篇 蘇聯國防力の基礎に就いて 佐多忠隆著
第三篇 植民地分割戰の歷史 佐藤弘著
第四篇 政治と文化 三木清著
第五篇 米國の經濟恐慌と世界經濟への影響 加田哲二著
第六篇 事變の終局と新支那の發展方向 吉岡文六著
第七篇 歐洲經濟の危機 金原賢之助著
第八篇 大陸發展の新標識 蠟山政道著
第九篇 事變解決の根本基調（この篇十五錢） 河相達夫著
第十篇 東亞協同體と太平洋戰爭（この篇十五錢） 原勝著

全十篇・定價各拾錢（送料三錢）・四六判並製四十頁內外

東京市麹町區六番町三ノ四 日本青年外交協會發行 電話九段(33)二九八三番 振替東京八五七五三番

390
422

終